

ツエランのパリ

——新しい出発——

北 彰

一 パリへの途上

【ウィーン一九四八年六月二五日】

この日ツエランはバッハマンの二二歳の誕生日を二人で祝っていた。インゲボルク・バッハマン（一九二六—一九七三）はツエランより六歳下、後に詩人としてドイツ文壇で名を馳せることになる人である。当時彼女はウィーンの文学サークルに出入りしており、サークルの中心人物である一八歳年上のハンス・ヴァイゲルと親しい関係にあった。バッハマンはエドガー・ジュネの家でツエランと知り合ったようである。長くツエランとの関係が噂されていたが、その関係が赤裸々に示されたのは、バッハマンとツエランの往復書簡集が二〇〇八年に公刊されたからだった。

ツエランのパリ

二人とも戦後ドイツ詩壇における著名な存在であったから詩人同士の恋として大きな話題となった。

二二歳の女性としては珍しいと思えるのだが、彼女は両親宛に身の回りに起こったことを詳しく報告していた。例えば五月一六日にツェランと知り合ったこと。

「いいえ、今日はまだ伝えることがあったわ。画家ジュネのところで一昨日の晩に知り合ったシュールレアリスム詩人でとても魅力的なパウエル・ツェランのことよ（中略）今私の部屋はケシの花畑になっているの、だって彼がケシの花を私の頭から注ぎかけたがったからよ」⁽¹⁾。

あるいは六月二五日の自分の誕生日について。

「パウエル・ツェランからマチスとセザンヌの最近作を含めた豪華画集二冊と、チェスタトン（イギリスの有名な詩人）の詩集、花、シガレット、そして私に捧げられた一篇の詩、休暇に帰省した時見せることができる彼の写真を貰ったわ。（彼は明日パリに向けて発つ）」⁽²⁾。

ツェランはバッハマンの誕生日に、彼の経済事情からするなら不釣り合いと思えるほどの大盤振る舞いをしたことが分かる。ツェランのバッハマンに対する「思いのたけ」の大きさ、また恋の駆け引きを示すものであろう。

彼女の記述通りであればツェランは六月二六日にウィーンを後にしたことになる。

この後バッハマンとツェランは長く曲折した関係が続けていった。

【インスブルックにて】

ツェランはウィーン西駅二三時三〇分発列車でパリに向かったと思われる。インスブルック到着は時刻表によれば

翌日の午後二時一五分である。六月二六日にウイーンを離れたとすればインスブルックには二七日着、そこで途中下車し七月八日にフランスへの入国許可を得ているので、インスブルックにはしばらく滞在したことになる。当時英仏米ソ四カ国に占領されていたオーストリアからフランスに出国するには、占領国であるフランス当局の許可が必要とされていた。インスブルック滞在中の七月五日にツェランは市内ミューラウにあるゲオルク・トラークルの墓に詣で花を捧げている。

トラークルはツェランが強く心惹かれていた詩人である。夕方には教会墓地近くに住んでいたルードヴィヒ・フォン・フィツカー宅を訪ねている。シュペルバーの紹介によるものであった。フィツカーはインスブルック大学教授を父に持ち大学在籍中から作家活動を始めた。やがて出版編集の仕事に携わり、一九二〇年から五四年にかけて雑誌『ブレンナー』を発行した。初期『ブレンナー』は前衛的雑誌であり、一九二二年からほぼ毎月フィツカーの友人であったトラークルの詩を掲載した。カール・クラウスとも密接な関係があり、クラウスの雑誌『ファツケル』と並ぶオーストリアにおける著名な個人雑誌だった。

ツェランは二八歳なるうという若者。文壇に広く認知されているわけでもない海のものとも山のものともつかぬ無名の詩人である。対するフィツカーは文壇にあって著名な存在であり、六八歳の大御所ともいふべき人であった。ツェランはさぞかし緊張していたと思われる。ツェランはフィツカー夫妻とフィツカーの娘あわせて三人の前で自作を朗読した。後に娘のブリギットはツェランの様子を次のように記している。

「ツェランの容姿は上品な印象を与えるものでしたが、物怖じした態度で遠慮深く自分を理解してほしいと嘆願するような風でした」。

この時のことをツェランは翌日六日、ブカレストのルート・ラックナーとマルグル・シユペルバー宛にすぐ書き送り報告している。フィツカーに会い自作に対する彼の反応を知ることがツェランにとっていかに大きな意味を持っていたか、そしてまたフィツカーの言葉がいかにツェランを喜ばせたかが推測されよう。以下シユペルバー宛の手紙である。

「フィツカーから私は、エルゼ・ラスカ・シユューラーの遺産を受け継ぐべきものであると言われました。はじめ私はなぜそういわれるのがよく分かりませんでした。というのも自分では彼女等より、トラークルやエリユールの方にもむしろ強く結びついていると思っていたからです。しかしフィツカーはシユューラーの最後の詩集『青いピアノ』を机から持ってきました。彼にとつてシユューラーはトラークルと同じくらい大切な詩人なのです。トラークル自身シユューラーには多くのものを負っているのだともフィツカーは考えているのです。こういったことを彼はまるで私がトラークルやシユューラーの仲間内の一人とでもいうような風にして話してくれました。とりわけうれしかったのは彼が私の詩の中のユダヤ的なものについて正面から論じてくれたことです」⁴

ツェランが一体何篇の詩を朗読したか不明だが数多くない詩の朗読を聞いただけでこういった批評ができるフィツカーは慧眼の士と言えよう。後になってツェランの詩集『骨壺からの砂』を読んだ彼はツェラン宛に以下のような感想を書き送っている。

「あなたの詩の印象、しかも繰り返しまみかえってくるあなたの詩をお聞かせいただいた折の印象が私にとってどれほど強烈なものであったかを、あなたにお伝えしたいというのが私の心からの願いなのです。(中略) この『骨壺からの砂』もまた、金の砂であることは明らかであると思います。なるほど記憶の深みと広さから、忘れがたい無常の大海へと、もうすでに押し流されかけているかのように見えますが、それにしてもしかし詩作の動機となった時代の特徴を表わしながら、あなたの抒情詩に特有なものが、冷静沈着でありながら同時に輪郭のぼやけた姿を取って、詩が下した最終的決定である見極め難さの中へと流れ込んで行くのを目の当たりにするのは実に心動かされる光景です。(中略) この時代の類例のない剥き出しの晒され方から受けた衝撃を、個人的に克服してきたことを示す省察を経た表現が、あなたの詩に重要な特徴を与えています。それが、それら全てが、あなたの詩という鏡の中に実に圧縮されて詰め込まれていると見えるのです。(中略) あなたの場合のように、言葉における形象と感覚の絡まり合いと、詩の拠って来たる世界の本源的なものとが見事に共鳴させられている時、あなたがなされてきたこのような対決の跡を辿ってみることは、離散ユダヤ民族を襲った夜、その夜空に輝く星の下での孤独な人間の運命に対して、なお心を寄せている誰にとっても——とりわけキリスト教徒にとって——些事であるわけがありません⁽⁵⁾」。

ツェランはやがて妻ジゼルや息子のエリックとフィッカーを訪問することになる。それはしかしかなり後になってからのことである。

【詩「旅の途上にて」】

詩「旅の途上にて」をツェランはウィーンにいた頃バッハマンに献呈している。しかし同時にインスブルック六月二八日付けの葉書にこの詩を書き記し、ブカレストのシユペルバー宛にパリ到着後郵送している。

旅の途上にて

塵をおまえの伴侶とし、

パリのおまえの家をおまえの手を犠牲として捧げる場とし、

おまえの瞳の黒色を最も黒くする、

いまはその時だ。

それは農夫の屋敷、そこにおまえの心のために馬車が止っている。

おまえの髪はたなびこうとしている、おまえが馬車を走らせようとするとき——しかしそれは禁じられているのだ。

留まり手を振っている者たちはそれを知らない。⁽⁶⁾

この詩の第一連からは、これから暮らすことになるパリで、自分の人生を詩作に捧げようとする決意が伝わってく

る。「手」は詩を書く手である。その手を「犠牲として捧げる」とはすなわち、詩を書くために自分の人生の全てを犠牲にするということである。「塵を伴侶として」という表現からは、自分が常に旅の途上にあるとの意識が感じられる。たとえパリに定住しようとも、それは自分にとって人生の「旅」の一部なのだ。ディアスポラの意識を持つユダヤ人にとって、形は定住であれそれはしかし異国の空の下における変わらぬ「旅」なのである。

二 パリ到着

ツェランがインスブルックからシュトラースブルクを経由してパリに着いたのは一九四八年七月一三日だった。無国籍者の流れ者、フランス人ではない「よそ者」のパリ生活の始まりである。一九三八年一月のトゥールにある医学準備学校入学前に、ツェランはパリにいた母の兄弟ブルーノ・シュラーガーの許に身を寄せパリ見物をしていたことがある。パリは完全に未知の世界というわけではなかった。ブルーノは強制移送されアウシュヴィッツで殺されていたが、かつてパリで過ごしたブルーノの住まい近くの安宿にやがてツェランは落ち着くことになる。パリ大学の近くであった。

同じルーミアニアからパリを目指していた「よそ者」で、パリへ向かう途上ブダペストで知り合っていたイサク・キヴァが一足先にパリに着いており、ツェランをあれこれ助けたようである。キヴァはツェランより五歳下、一九二五年ルーミアニアの北東部に位置するヤシという町に生まれたユダヤ人で、一九四一年ヤシで起こったボグロムを幸運にも生き延び、戦後パリに向かった社会民主主義的考えを持ったジャーナリストであった。ツェランと同じくパリ大学

に学び、後にクロード・レヴィ・ストロースと研究を共にしたこともあり、フランスの著名な文化人類学者となった。二〇一二年に死去している。

【なぜパリなのか】

ところでツェランはなぜパリを目指したのだろうか。普通考えるならすでに親族が定住している国を選ぶのではないだろうか。ツェランの場合、父の四歳下の妹であるベルタおばさんが、ナチに併合されたウィーンを逃れ戦前からロンドンに住んでいた。しかもツェランはこのベルタおばさんを慕い甘えていたのである。

一九三九年トール医学準備学校在籍中の復活祭にツェランはベルタを訪ねていた。一九五〇年二月にはベルタがパリにツェランを訪ね、同年三月にはイスラエルから船でロンドンに帰る途中のベルタに会いにツェランはマルセイユまで出かけている。また五一年八月から九月にかけてもツェランはロンドンにベルタを訪ねている。かなりの頻度といえよう。しかしツェランはロンドンを居住の地として選ぶことはなかった。

あるいはイスラエルはどうだろうか？ ツェランがシオニストであればそういった選択もあったかもしれない。しかしツェランはシオニストではなかった。またイスラエルが国家として成立したのは一九四八年五月であり、周辺のアラブ諸国と戦争が始まっていた。

イサク・キヴァがブダペストでツェランと出会った時、すでにツェランは自分の目的地はパリであると語っていたという。東欧辺境の地の文学青年が西欧文明の中心地と見なされていたパリに憧れるのはそれ自体よく理解できる。彼はパリについて詳しい知識を持ち、パリに出てきた「お上りさん」を案内しては、その知識を披露していたよう

だ。田舎者であるからこそ「花の都」パリについて「勉強」をしたのであろう。

またシユベルバー宛の手紙で書いているように、ツェランはフランス文学とりわけエリユアールに惹かれていた。チエルノヴィッツではフランス文学を専攻している。またリルケの『マルテの手記』を愛読していた。『マルテの手記』の舞台はパリである。フランス文学にせよ『マルテの手記』にせよ、現実世界とは異次元のものである。生活するにあたって有利なロンドンではなく、自分という生身の人間をどこかで超越している文学という異次元の力がツェランをパリに誘う決定的な力になっていたと思われる。

一九四九年七月三日付けのエーリカ・ジュネ宛の手紙でツェランはウルズラという女性について言及している。ウルズラは画家であり、またウィーン・オペラ座の舞台監督夫人で、ツェランとはウィーンにおける「第一回シユールレアリスム展」で知り合っていた。一九四九年三月二日から二九日まで、ウィーン・オペラ座はカール・ベーム指揮の下、パリでモーツァルトの歌劇公演を行った。その時ウルズラはツェランに依頼され、ジャン・パウル全集の一部を持参していたのである。

そのウルズラと会ったことを報告するこの手紙の中では、ウルズラがウィーンを去り、パリに赴くにあたって詩の朗読会を開いたことになっている。しかしこれは実はツェランが自分自身の姿を仮託して描いたものと思われる。ウルズラと称される女性とツェランの生の軌跡が一致すること、そして内面の激しい動きをこれほどまでに露わに描いていることがそう推測させるのである。

「あれはウルズラの出発前のことだった、一〇年たつてついに彼女は再びパリに向かって出発したのだ、それは

殆ど信じられないことだった、ああいった体験の全て、苦しみ抜かれたこと、戦争や収容所の後で、数知れぬ意気阻喪の後で、絶望的でひどく苦しい待機の後で、喪失、喪失、たび重なる喪失の後で、再びパリに向けて発つことが許されたのは、一つの奇跡だったのだ。それを彼女から見取るのはおおよそ難しいことではなかった、朗読した時の彼女の声からも気づかされたことだ。彼女はどれほど心を打ち震わせていたことだろう！（中略）彼女の声はひどく小さくて震えていた、それほどに興奮していたのだ、なぜならばそう見えたのだが、彼女はいままさに自分が、詩および詩人たちに仕えているのだと、そう信じていたからなのだ。⁷⁾

そしてまた一九四八年八月二日にツェランはイスラエルにいる親戚宛に次のような手紙を出していた。「おそらく私はユダヤの精神性が持つ運命をヨーロッパで最後まで生きなければならぬ最後の人間たちの一人なのです」⁸⁾と。

【まず目指したこと——大学入学】

パリに落ち着きツェランがまず何よりしなければならなかったことは収入を得る手立てを見つけること、そして住まいを確保することであつたらう。そして大学に入学し大卒の資格を得て有利な職業に就き安定した収入を得て生活できる「普通の市民」となることである。

パリに到着した秋、一九四八年一月半ばパリ大学に入学登録をした。無国籍者で入国許可証しか持たぬ身にあつては、学生証も身分を明かす一つの証明となる。奨学金も得られる。アルバイトも見つけやすいであろう。事実ツェランは奨学金を得ると共に語学力を生かし語学教師として、家庭教師やベルリッツ語学学校講師を務めたり、翻訳仕

事で生活費を稼いでいる。電機工場で労働したとされているが、それも実は工場に行き翻訳仕事に携わっていたのではないかと言われている。ついでに言えば大学図書館を利用でき、大学の学生食堂や市中の劇場や美術館、それに映画館などを安く利用できるという特典も得られるのが学生である。

大学入学有資格者であることを証明するためには語学試験を受けなければならなかった。

興味を引くのはツェランがフランス語の独訳試験と、英語の仏訳試験を受けていることである。得点はそれぞれ二〇点満点で一七点、一一点であった。ブカレストでロシア語をルーマニア語に訳す仕事をしていたツェランにとって、英語の仏訳試験ではなくロシア語の仏訳試験を受けていた方がおそらく得点は高かったと思われる。しかしそうしなかった。

一九四六年から始まっていた冷戦の中でルーマニアからの入国者に対して西側諸国には警戒心があったと思われる。コミンテルンの後を継ぐコミンフォルムの本部も、独立路線を取るチトーのユーゴスラヴィアを除名した後は、一九四八年からブカレストに置かれていたのである。ついでに言えば、戦後日本共産党を所感派と国際派に分断し、分派闘争のきっかけを作ったのもコミンフォルムの日本共産党批判であった。ツェランは、語学試験においてロシア語を選択することで、ソ連政府機関との関係を疑われることを避けたかったのかもしれない。

語学試験に合格したツェランは一九四九年三月に大学入学有資格者と認められパリ大学文学部入学を果たした。一九五〇年七月文学士の資格を得ることになる。

【市民権獲得のために】

フランス国籍を獲得するには五年以上決まった住所で生活することが条件だった。フランスの大学卒業者ならその期間は二年に短縮された。一九五〇年七月に文学士の資格を取得すると翌一九五一年一月五日にツェランはソルボンヌ地区警察に帰化申請書類を提出している。

書類にツェランは一九三八年から翌年に亘るフランス滞在について触れ、一九三九年ルーマニアに帰国しなければならなかった事情、両親が殺害されたこと、自身二年間強制労働に就いたこと、ウィーンを経由してパリに来たことなど、自分の経歴と共に自分がフランスの文化や精神を愛しており、知識を深めこの文化国家で生活することを望んでいること、帰化が自分のその熱烈な願いをかなえる手立てであることなどを書き記していた。

一九五二年七月に一九五四年五月まで有効の在留許可証は交付されたが、一〇月一五日付けで帰化申請は却下された。「忠誠心に関しなお吟味を要す」「あと三年」という審査官のコメントが書類には残っている。ツェランはこの結果に大きな打撃を受けた。

再度の試みは一九五三年七月になされる。すでにフランス人女性ジゼル・レトランジュと一九五二年一月二三日に結婚していること、妊婦であることなども申告していた。フランス人女性との結婚が帰化に有利に働くのではないかとの思いがあったのかもしれない。出生地主義のフランスでは子供は自動的にフランス国籍となるが父親はそうならない。

ツェランはルーマニアでの職業を明記していなかったため一九五四年六月に当局の呼び出しを受けている。ブカレスト大学でフランス文学を学んでいたことだけを申告していたようである。カルテア・ルーサというルーマニア・ソ

連友好促進協会が設立した出版社に勤務していたことは伏せた方がよいとの判断があったのであろう。

再度の試みにあたっては、二人の結婚式の証人にもなったジゼルの女友達、その女友達の父が助力したのではないかとわれている。彼は高名な微生物学者でありパストゥール研究所所長も務めた人で、帰化申請を扱う政府機関にコネがあったとみられる。

今回はうまくいった。一万六〇〇フランの手数料を支払った後、一九五五年七月八日帰化証明書に署名し、七月一七日付け官報でツェランがフランス国籍を得たことが公示されたのである。これでツェランは「普通の」フランス市民になることができた。

三 始まったバリでの生活——大学で出会った人々

ところでバリでの生活をツェラン自身はどのように受け止めていたのだろうか。まず彼自身の言葉を拾い上げてみよう。一九四八年一〇月二四日付けの、スイスの高名な文芸批評家マックス・リヒナー宛手紙。

「そしてこの手紙の最後に申し上げなければなりません、私が申し上げたいと思っていたことを書くことができなかったということ、つまり私がひどく孤独で、この素晴らしい街の只中に居ながらどうしたらいいか分からないままでおり、プラタナスの葉以外何ものをも手にすることができないのだということ⁹」。

あるいは一九四九年一二月二日付けルート宛手紙。

「今年は影で覆われた暗い一年でした。少なくともぼくにとってそれは、孤独、孤立、自閉としか言いようのない

一年だったのです」¹⁰。

ヴォルフガング・エメリヒが言うように、パリに着いたツェランは文字通り「何者でもなかった」¹¹。すなわち無国籍者で、財産を持たず、無職で、無名だったのである。そういった人間がパリのような大都会で「プラタナスの葉以外何ものをも手にすることができない」と訴え、心が凍え冷たく固まっていくのは理解できることである。

一方しかしツェランは三〇歳前後の若者である。常に心が暗く閉ざされたままであったはずがない。同時に明るい光もさし込んでいたはずである。ツェランは友人や女性たちとパリを散歩し、観劇に出かけ、展覧会を訪れ、それらを楽しんでもいた。時に明るくノンシャランなふうでもあり、酔って寝込んだ者にわざわざ毛布を持ってきて掛ける優しさも見せていたという。他者との交流は確かにあつたのだ。次に大学で出会った人々、そしてまた大学生活の一端を紹介しよう。

【モスコヴィツシそしてゴールドマン】

ツェランはイサク・キヴァに加えてルーマニアからのユダヤ人亡命者であるセルジュ・モスコヴィツシとも知り合った。彼は一九二五年生まれでツェランより五歳下、一九四一年のブカレストにおけるボグロムの証言者でもあり、強制労働収容所での労働にも従事した。非合法下のルーマニア共産党入党、しかし戦後共産党政治に幻滅している。彼は後にヨーロッパ社会学研究所の責任者となり、世界中の多くの大学で講じると共に、ヨーロッパ科学芸術アカデミー会員ともなった。レジョン・ドヌール勲章も授与され、二〇一四年に死亡している。

彼は著書『パリにおける私の戦後時代』の中で、自分自身、キヴァ、ツェランの三人を総称して「よそ者三人組

(les trois métriques)」と記していた⁽¹⁷⁾。フランス語の métriques は、フランスに住む外国人を軽蔑するという表現で、胡散臭い外国人、といった意味も含まれている。同じ著書によれば、ツェランはモスコヴィツシに加えてルーマニアからの亡命者リュシアン・ゴルドマンとも、市内にあるユダヤ人亡命者が集まる食堂で知り合ったようである。一九四八年七月ツェランのパリ到着直後のことであった。リュシアン・ゴルドマンはユダヤ人で、後に高名な哲学者・社会学者となり、パリ社会科学高等研究院で教えた。ツェランより七歳年長、一九一三年生まれで一九七〇年に死去している。著作は日本でも多くが翻訳された。

【トラウテ・オグリス】

一九四九年二月、大学の学生食堂でたまたま同席した、ナイフを持たないでいた女子学生トラウテ・オグリスに、ツェランは自分のナイフを貸し与えた。発音にオーストリア訛を察知したツェランは彼女にドイツ語で話すよう依頼したのである。異国にいて異国の言葉で生活しなければならぬ人間にとって、母語で心ゆくまで話せることがどれほどの解放感を齎すことか、経験者なら理解できよう。彼女は一九一九年生まれ、ツェランより一歳年上だった。

以後ツェランは気が向くと彼女が通っていた音声学教室に向向いて彼女とお喋りしたり、あるいはホテルの自室に繰り返し彼女を招待した。そういった時ツェランはベルタおばさんが送ってくれた珈琲を淹れてもてなした。ツェランは自作詩を朗読したり、フランス文学、とりわけサルトル、カミュ、クロードル、モンテルランなどについて話したという。二人は公園やセーヌ河岸を散歩したり、古本屋を覗いたり、美術館を訪問したりした。

彼女はコンサートや観劇に誘うことは遠慮したようである。ツェランに経済的余裕がないことが分かっており、ま

た招待することでツェランのプライドを傷つけるのを恐れたのである。ツェランは自分の戦中体験、両親が殺害されたことなども手短かに話していた。ある日サンジェルマン・デ・プレのカフェでお茶を飲んだ時、目の前で詩「フランスの思い出」を書いてくれたという。ツェランには人なつっこさもあつたが、悲しげで、憂鬱そうで、一人ぼっちに見えたようだ。一九四九年八月二日、オグリス帰国にあたってツェランは見送りにパリ東駅まで来てくれた。帰国後オグリスは二度に亘りツェランに手紙を書いたが、返事を一度貰っただけで文通はそれで途絶えた。以上はクラウス・アーマンが、二〇〇二年に逝去したオグリスに会い、聞き書きした内容である。¹³⁾

【イヴ・ボンヌフォア】

一九四九年冬に、学生食堂で順番を待つて並んでいた列の中で、ツェランはイヴ・ボンヌフォアと会い親しくなった。彼はツェランより三歳下、シュールレアリスムに関心を持ち雑誌を刊行していた。しかしやがてシュールレアリスムからは離れていく。ツェランと出会ってしばらく後にはイタリーやオランダ、イギリスなど広く各地を旅行して回ったようである。後に詩人、芸術批評家、翻訳者として名を成し、世界の大学で講義すると共に、様々な賞を得て二〇一六年に没している。ツェランは彼を通してフランス詩人を知っていくことになる。

とりわけツェランとの関係でいえば、雑誌レフェメールの共同編集にあつたことを特筆しなければならぬ。一九六八年夏に、ツェランはイヴ・ボンヌフォア、ジャック・デュパン、アンドレ・デュブーシェらの編集委員会に招かれて参加することになったのである。雑誌にはツェランの詩も掲載された。

「彼の微笑は」とボンヌフォアは書いている。「しばしば傷ついた記憶がたぎり立つてくるのを隠すものではあつた

が、優しさそのものだった」と。そしてまた「とりわけウィーンから来たばかりの数年間というものの彼の所作にはどこかノンシヤランなところも見えた」⁽¹⁴⁾。

【大学の授業、あるいはスターリン主義】

ツェランは言語学にも強い関心を持っており言語学ゼミにも出席していた。そこでツェランに発表の機会がありスターリンの言語論を批判すると、大学助手からしばしば中断され挑発すら受けた。この助手は後に著名なフランス言語学者となる人物で当時はフランス共産党の熱心な活動家であった。

このエピソードはキヴァの次のような叙述を想起させる。

「私たち(キヴァ、ツェラン、モスコヴィツシ)、すなわち左翼で、しかしコミニズムから逃れてきた者にとつては、教条的スターリニストの熱気の下にあった首都パリの知的環境は、パリ滞在初期にあつては苛酷だった。私たちは岩礁と難所の間に捕われていた。一方では、フランスの大学関係者から「ファシスト」と見なされており、(中略)他方、その殆どが剥き出しの極右とまではいかないにしろナシヨナリストであつたルーマニアの亡命者たちからは、ブカレストかモスクワから金をもらつている「スパイ」だとすら言われていたのだ」⁽¹⁵⁾。

一九四八年八月心筋梗塞で急死したソビエトのジダーノフ、スターリン後継の最右翼と目されていた彼が、イデオロギー的統一を図るいわゆるジダーノフ路線を押し進め、その影響がフランスやイタリア共産党にも及んでいた時期であつたから、キヴァのこの記述には説得力がある。

またルーマニアにおける知人であつたクロフマルニチャヌの次のような証言も興味あるものだ。一九六六年に彼

がパリに旅行した際、ツェランが彼を夕食に招いてくれたのだという。食事の終わり近くになって突然ツェランが「同志ブイカンがどうなったか教えてくれないか？」と聞いてきた。

実はツェランはカルテア・ルーサに入る前はルーマニア共産党機関紙編集部で働き、ソビエトの新聞や党機関紙を読み重要な記事をルーマニア語に訳す仕事をしていた。ブイカンはそのトップだった。彼はルーマニア共産党の老コミュニストで、フランスレジスタンスグループの活動に参加中捕えられ、アウシュヴィッツ送りになったが、ガス殺間際に助かった人であり、戻ってきた時に髪は真っ白になっていたという。出世欲に無縁で自分に対する批判を受け容れることができる稀な人物であり「規律ある兵士」だった。しかし良きスターリニストとしてとても疑い深く、政治的機会主義者と見なした者には厳しく当たった。ツェランに対して彼は抜き難い反感を持っていたのだという。編集部からツェランを追い出すだけでは満足できず、カルテア・ルーサ編集部にまで電話をかけ、ツェランは階級の敵と通じている、と告発したらしい。そのブイカンはツェランとクロフマルニチャンヌがパリで会っていた時、すでに長く精神病院に入院している身であった。⁽¹⁶⁾

「良きスターリニスト」から見るとツェランはどのように見えていたのか、その一例である。キヴァの記述と響き合うものがある。

四 ウィーンからやってきた友人たち

【ミロ・ドーア】

ミロ・ドーアはツェランより三歳年下で、一九二三年にブダペストの医者の子として生まれている。ハンガリーとユーゴスラヴィアで幼少年期を過ごし、ベオグラードでギムナジウムに入学した。反ファシズム運動に参加していたため四二年警察に逮捕されウィーンで強制労働に就かされた。一九四四年から四九年までウィーン大学で学ぶと共に雑誌『プラーン』編集部に入りにしたが、この頃ツェランと知り合ったことになる。

ドーアは最初からツェランに友情を感じたという。二人は年齢も近く、シュールレアリスムに深い関心を寄せ、アンドレ・ブルトンやルイ・アラゴン、エリユアルやルネ・シャールなどフランス文学について論じ合っていた。また二人とも「ひどい過去」を持ち「どうなるか分からない」未来に向かい合っている若者だった。二人で革命歌を高唱したこともあったらしい。

偽名を使い偽造したバスポートでドーアは一九四九年春にパリのツェランを訪れた。わずかな賃料でソファを借り、安宿のツェランの部屋の前室にドーアは寝たが、このソファの上で寝て過ごした三週間はドーアの人生において最も幸福な三週間だったと後に述懐している。トイレは共同で一階上か下にあった。収容所で生活していた人間にとってしかしこうといった環境も贅沢と感ぜられたのである。

パリにおける文化生活の現状をルポし記事を書くためドーアは熱心に劇場や展覧会その他様々な催しに出かけた。サルトルの「汚れた手」や「恭しき娼婦」などがとりわけ印象に残ったらしい。

当時のパリは議論の余地なくヨーロッパの精神的活動の中心地であり、実存主義が勃興していた。そのパリでドーアとツェラン二人の興味を引く面白い出来事が起こった。一人のアメリカ軍人がアメリカのパスポートを破り捨て、「世界市民」のパスポートを与えよとテントを張り訴える騒ぎがあったのである。警察に逮捕されたこの軍人を守り「世界市民」の概念を広めようと知識人たちが委員会を結成した。格好の「遊び」と見たドーアは連帯の挨拶を書き、そこにツェランも口を差し挟み、二人して委員会に出かけたのである。すると無国籍者のルーマニア人とセルビア人として大歓迎を受け、カミュまで二人のところにやってきて挨拶したのだという。ドーアはこの一件を記事にしてウィーンに送り、それは大きく新聞紙面を飾ることになった。

【ナーニ・マイアー、そしてクラウス・デームス】

ナーニ・マイアーはツェランの五歳下、バツハマンの女友達で後のデームス夫人である。

ナーニとデームスは雑誌『ブラーン』に掲載されたツェランの詩から深い印象を受けた。それをナーニがバツハマんに話し、それが機縁となりツェランとデームスがブルク劇場近くのカフェで初めて会うことになる。デームスはおぼろげとしていて話が弾んだとは言えなかったようだ。ツェランが自分より年長の者に会う時示す態度と全く同じであるのが面白い。ツェランがバツハマンの誕生祝いの本を買う際に書店で会ったのが二度目である。デームスは自作の詩をツェランに読んで貰い、それから二人の文通が始まった。

一九二七年生まれ七歳年下のデームスをツェランは弟と呼ぶようになり、ツェランの精神の病のせいで一時途絶えた時期はあったが、終生二人は親しい関係にあった。ツェランが最も親しくしていた友人であったと言えるのではな

いか。

デームスの父は著名なビザンチン芸術史専門家であった。一九三九年ゲシュタポに逮捕されるとの警告を友人から受けロンドンに亡命。その前に離婚していた母と息子二人はウィーンに残った。母はヴァイオリニストであり、弟のイエルク・デームスは世界的に著名なピアニストとなった。戦後ウィーンに帰国した父はやがてウィーン大学芸術史正教授となる。デームスは詩人であり美術史家、後にウィーンの芸術史博物館学芸員となっている。

デームスはツェランから父母のことや戦争中のことについては一切聞いていなかった。また一九五五年三月、デームス夫妻がロンドンにいたツェランを訪れた際にベルタが来合させたが、ツェランは二人に叔母を紹介しなかったという。驚かされる事実である。ツェランの対人関係の作り方の特異な点であるのかもしれない。ツェランとデームスはもっぱら詩を介して付き合った。しかしながら詩の中に現れるユダヤ性を巡る議論は一切なかったという。

デームスは一九四九年一〇月から翌年五月まで現代美術に関する論考執筆のためパリに滞在した。「ツェランはたいへん孤独だった」とこの頃のツェランについて後に語っている。

ナーニも続いて一九五〇年一一月から一九五一年夏までパリに留学しドイツ文学研究に勤しんでいる。カフカがテーマだった。後に修士課程に進学しカフカ論を書くようとしていたツェランから、その折の論文や参考文献を参照したい旨の申し出を受けている。

留学中二人はツェランと交流し、またデームスは様々な本をツェランに送るなどしてパリ滞在初期のツェランを助けたようである。またバッハママンとツェランの関係が困難になった時はその困難を和らげる努力をしている。

【ジュネ、そしてジャン・ドミニック・レイ】

アンドレ・ブルトンから挨拶を託され、一九四八年パリからウィーンのジュネの許を訪ねたのはジャン・ドミニック・レイだった。彼はパリに帰ってすぐツェランを訪ね、ツェランをブルトンに引き合わせたのである。ツェランはブルトンに幻滅したが、短期間はパリのシュールレアリストたちと交流を持った。

ジャン・ドミニック・レイはツェランより六歳下、一九二六年生まれで二〇一六年に亡くなっている。ツェランやナーニと一緒にパリ市中を歩いている写真を見るとかなり背丈のある細身の人である。クラウス・デームスとも交流を持った。興味関心はかなり広範囲に亘った人らしく、多くの作家や芸術家と付き合い、ジャーナリズム関係の仕事をしたり、出版社に勤務して美術関連図書出版をしたりしている。詩集もある。レイを通してツェランはコンスタンチン・ブランクーシやヴェイクトル・ブローネルを知った。しかしツェランはジュネの妻のエーリカ宛手紙の中で、レイのことをロバと言っている⁽¹⁸⁾。「馬鹿者」の意であろうか。内心馬鹿にしていたのかもしれない。

ツェランのパリ到着のおよそ半年後、一九四八年二月二日から二一日までパリの画廊兼本屋でジュネの展覧会が開かれた。この展覧会にブルトンはバンジャマン・ペレ、ジュリアン・グラック、モーリス・ナドーと共に訪れている。ツェランもジュネと会っている。また一九四九年一月にはパリにやってきたジュネが、ツェランの狭い部屋におよそ三週間泊りパリ見物をしている。ミロー・ドーアと併せるとこの年は長期に亘る居候が春と秋と二回あったことになる。「やっと帰ってくれて、夕方部屋に一人でいることができるようになった⁽¹⁹⁾」とツェランはオランダ人女性デイト・クロース・バーレンドレ宛手紙の中に書いていた。

上記してきたように、ツェランの許を訪れたウィーン関係の友人たちは実は結構多いのである。また先に記した

ように、大学で知り合った人たちもいた。ツェランが言うように確かにパリにおけるツェランは「孤独」なのであるが、しかしツェランの言を文字通りそのまま受け取り、紋切り型のひどく「孤独な状況」のみがツェランの「現実」と考える必要はなさそうである。

五 イヴァン・ゴル、クレール・ゴルとの出会い

イヴァン・ゴルは著名な詩人であり、ゴル夫妻はリルケとも交友があった。ゴルは一八九一年独仏国境地帯であるフランスのヴォージュ生まれ、ツェランより二九歳上でいわばツェランから見れば父親の世代である。ユダヤ人だった。ドイツの大学で学び学位を取ったが第一次世界大戦の時には平和主義者として徴兵を逃れスイスに亡命、チューリヒのダダと接触を持った。戦後はパリに移住、第二次世界大戦が勃発するとニューヨークに亡命。一九四七年に妻のクレールと共にニューヨークからパリに戻ったが、ゴルは帰国後まもなく白血病を発症した。

シュペルバーの紹介でツェランがゴルに手紙を出したのは一九四九年九月二十七日であるが、二人が旅行中だったためツェランが二人に会ったのは一一月になってからだった。最初の出会いはイヴ・ボンヌフォアの部屋。二度目は一九四九年十一月六日。ゴルの日記によると、ホテル住まいをしている二人の許にやってきたツェランは自作の詩を朗読しようだ。二人はリルケやトラークルの影を感じさせるツェランの詩の真価を見抜き、ツェランの詩的才能を認めた。ゴルはとりわけ「死のフーガ」に魅了されたと記している。ツェランはひどくおぞおぞとしていたが、同時に誇り高く詩人としての自分の使命を自覚している、精神的欲求の強い若者とゴルには見えた。ツェランはクレールに

八本のバラを持参し、ゴルフ夫妻はその日ツェランを夕食に招待している。ツェランは詩集『骨壺からの砂』を献上し、イヴァンは自分の詩の独訳をツェランに依頼した。即ち最初の出会いはお互いにとつてたいへん幸福な出会いだったのである。⁽²⁰⁾

一月二日付けエーリカ宛手紙の中でツェランはこの日のことを報告している。その中でツェランはゴルのことを「本物の詩人」であり「パリで出会った人たちの中で真の人間と言える最初の人だ」と評していた。また「ぼくを真の詩人と認めてくれたようだ」⁽²¹⁾とも。

それ以来、一九五〇年二月二十七日ゴルが五九歳で死亡するまで、ツェランは何度もゴルを訪問している。パリ留学中だったデームスと共に訪問することもあり、デームスがゴルに輸血をすることもあった。ゴルが亡くなった時枕頭にいたのはクレールとツェランであり、三月二日の埋葬にもツェランは立ち会っている。ゴルはツェランを遺言執行人の一人にすら指名したのである。

その後クレールはツェランに、ゴルがフランス語で書いた詩集三冊の独訳を依頼した。ツェランの詩がゴルの詩の剽窃であるとするツェランを誹謗中傷するクレールのキャンペーン、後のいわゆる「ゴル事件」のきっかけとなる独訳依頼である。以後の「ゴル事件」の展開をこの時一体だれが予想できたであろうか。

六 ツェランを巡る女性たち

(一) デイト・クロースバーレンドレ

【出会いとその後の文通】

一九四九年八月初め、ツェランはサン・ミシェル通りのカフェで、二人の女性客の隣のテーブルに偶然坐っていた。オランダ人女性デイトとその女友達である。二人は昨日オランダから一週間の予定でパリ見物に来たばかりだった。デイトが落した本をツェランが拾い上げ、それがきっかけで言葉を交わすようになったのである。デイトはツェランより四歳下の一九二四年生まれ、当時デン・ハーグ王立音楽学校声楽科の学生だった。⁽²²⁾

ツェランは様々なことを彼女に尋ね、彼女の過去のことについても知りたがった。デイトはナチ支配下のオランダで、一六歳頃から反ナチ抵抗運動に加わっていた。一九四四年一月に結婚したが、一二月に夫ともども逮捕され、夫は四五年一月に銃殺されたのである。僅か一六日間の結婚生活だった。

ツェランもデイトの話に応えて、両親の死や自分の強制労働収容所体験、そしてルーマニア脱出のことについて話したのである。

二人が初めてのパリであることを知ると、ツェランはパリ案内役を買って出た。互いの住所を教え合おうと、翌日同じカフェで待ち合わせ、パリ案内をしたのである。デイトはツェランのパリに関する文化史的知識の豊富さに驚いている。パリ見物を終えた後三人はツェランの部屋でお互いのナチ時代の苦しい体験について長時間語り合った。

ツェランはまた自作の詩を朗読し、「死のフーガ」のタイプ草稿をデイトに贈呈したのである。

それから三人は毎日会った。ツェランは注意深く選び抜いたパリ名所を案内した。ツェラン自身もまるで休暇中のようにして、二人のバリ滞在中は行動を共にしたのである。

ツェランはデイトに、すでに子供時代からパリに来たいと思っていたこと、今は奨学金を貰い、仕事を見つけ、決まった住まいを持ち、パリで新しい生活を始めたいと思っていることなどを語った。パリに着いて一年ほどしかたっていないツェランは、アルバイトで収入を得、とにかく日々の生活をたてること、また大学の勉学をとにかく続け学士号資格を取ることで汲々としていたから、定職に就きホテルの仮住まいではなくちゃんとした住居を持ち「人並みの」暮らしをしたいと願うのは自然なことであつたらう。

ツェランはまたパリで友人も殆どなく、経済的にも苦しいと話していたが、デイトが受けた印象はむしろ明るく快活であつたという。ときおり憂鬱そうであつたり不安げであつたりはしたが、礼儀正しく言葉遣いが丁寧で広い教養を持った特別な人間と見えた。

以後二人は約一年間に亘つて文通を続けることになる。この間お互いに誕生祝いを贈り合つたりした。翌一九五〇年夏デイトは二、三人の友人と連れ立って再びパリを訪れた。この時はしかしデイトはバリ滞在中もそこそこに友人たちとブルターニュ旅行に発つてしまい、アルバイトや学業に追われていたツェランとは二、三度しか会うことができなかった。

帰国後デイトはツェランに手紙を出したが返事は来ず、文通はそこで終わることになる。ツェランからの一二通の手紙は全て残されたが、デイトがツェランに宛てて書いた手紙は残されていない。一九五三年デイトがパリで

三カ月ほど勉学の機会を持つことができた折、ホテルのツェランの居室を尋ねたようだが、ツェランはすでにおらず消息も不明だった。ツェランはこの頃ジゼルと結婚し新居に落ち着いていた。デイトは二〇一五年に亡くなっている。

【デイト宛ツェランの手紙から】

ツェランはデイトに自分の気持ちを率直に明かしている。デイトの戦争中の体験、とりわけ深く愛する人をナチのために殺されていることが、ツェランの母を殺されている体験と響き合い、お互いの今の境遇を思いやる気持ちになっていったのではないかと推測される。次に一二通の手紙から印象に残る箇所を部分的に紹介したい。

ツェランとデイトは二人でゴードン・ヒースの黒人霊歌を聞きに行ったのだが、デイトが帰国してから再びツェランはその歌が聞ける店に出かけたのである。その時のことをツェランは彼女に報告している。歌われているのは黒人が奴隷から解放され自由になって故郷へ帰れるという希望を表わす「我らはヤコブの梯子を登るのだ」という歌であった。

「ぼくの坐っていたテーブルには、スカンジナビア地方の言葉で喋っている男と女がいました——デンマーク語かと思ったのですが結局ノルウェー語であることが分かりました——ノルウェー語での話は、彼らが突然オーストリア訛の強いドイツ語で話し始めるまで、かなり長い間続きました。その男がぼくにマッチを借りようと声をかけてきた時、ぼくたちは話し始めました。不愉快な話を。というのもその男はひどく酔っぱらって一杯機嫌に

なりながら、一体ぼくがどこでオーストリア訛を身につけたのか、どうして軍隊に行っていなかったのか、などを詳しく知りたがったからです。つまり彼は——すぐそれと気づきましたが——ただぼくがユダヤ人かどうかを知らなかっただけなのです。その疑問に対するぼくの答え如何でぼくに對する態度を決めようとしていたに違いないその男は、ぼくがユダヤ人であることを告げると、ひどく慌てふためいて、自分が喋ったことをどう引つ込めたらいいか分からなくなっているようでした——この男は確かに何らかの形でノルウェーの対独協力者であったに違いありません。そんな男にももちろん今この世界は開かれているのです。このゴードン・ヒースは（中略）こんなノルウェー人のような連中のためにも歌っているのだ、という思いがぼくをとらえて離さなくなっていました。そしてぼく自身には世界は開かれていないのです……（中略）。

もうそこからは自分は身をもぎ離してきたと思っていた過去という時が、ぼくなどが思っているよりもより狡猾であるということに君は気づいたでしょうか？ 過去は再び現れたのです。しかも一人ではなく過去の人間たちを引き連れて、こういったならず者たち全てを引き連れて、自分の姿を現したのです！ いや過去は再び現れたわけではありません、もうすでにそこにあつたのです」⁽²³⁾。

戦後まだ四年しかたっていない時期である。戦争の記憶はまだ鮮明だった。パリのようないろいろな国の人々が集まってくる大都會では、このような出会いもまた起こるのである。しかもあろうことか差別と偏見から脱して自由を得たいと願う歌を歌っている場所で。皮肉なことだ。ツェランは苦い思いに沈んでいくのである。

あるいはまた日常の中で繰り返し経験しなければいけない感情をツェランはデイトに訴えている。

「遊び好きの子どもであることを喜んでいた自分と今の自分とはますます違ってきてしまっています、そして——ごめんなさい——ぼくは二度と戻っては来ないものももたらす哀しみをなんとか乗り越えるのですが、そのとき感じる困難さは、どのように闇の中で一つの眼が光り輝いているのか知っていると信じている者が感じる困難さよりも大きいのです」⁽²⁴⁾。

「ぼくはとても孤独です、ディート。そして天のみにとどまらず、天の深淵とも格闘しなければならぬばかりか……日々の糧と言われるものを得るために、ひどく苦しい時を過ごさなければならぬのです——それはパリに住むぼくのような不器用な外国人にとっては楽なことではありません（こんなどうでもいいことを書いてごめんなさい）」⁽²⁵⁾。

しかしそんな中でツェランが一筋の糸としてすがり、掴んでいるのが詩作なのである。「もし仮に私の詩がきれいに印刷され製本されて一冊の詩集となったことを確かに知ったなら、それこそが私の出発点となることでしょう」⁽²⁶⁾。「ぼくは書かなければなりません、ディート、そうすれば生きることができなのです」⁽²⁷⁾。

【詩「煙水晶」】

ツェランはディートと、パリ中心部にあるシテ島にあるノートルダム寺院を望むセーヌ河岸テラスにあるカフェでワインを飲んだことがある。シテ島は周知のようにセーヌ川の中にある島であり、川に浮かぶ船とも見える。

後にディートはツェラン宛手紙の残された草稿中で、「ああ、パリにすることができさえすれば。そうすれば私は

あなたと一日中あちこち散歩して回り、そして長い夜通しずっとあなたと食事を共にして、パラダイスの禁じられた果実を食べるでしょうに (Paris と Paradis が二文字しか違わないのには何か意味があるに違いないのです)。私たちは虹を探し回りまたヴェールを探し出してそれをまといそれで身を飾るでしょう」と記していた。それに応えるようにツェランは以下のような詩を返事に添えていたのである。

煙水晶

パリ、小船のパリが、グラスの中に停泊している――

ここでぼくは君と食事を共にし、君に向かって乾杯する。

ぼくは飲む、ぼくの心が君のために暗くなるまで、

パリが涙の上に浮かぶまで、

明るく澄んだヴェールに向かって船が針路をとるまで、

ヴェールがぼくたちから世界を隠し、そこであらゆる君が一本の木の枝となり、

ぼくがその枝につく一枚の葉となるまで、決して人間などではなく。⁽²⁹⁾

二人のパリでの体験がもととなり、おそらくディートの手紙に触発されて書かれた詩なのであろう。ノートルダム寺院のあるシテ島、パリの象徴ともいえるシテ島は、セーヌ河岸から見ると船にも見え、ワイングラスにその姿を映

している。「ほく」は盃を重ねていくのである。心が暗くなりパリが涙の上に浮かぶまで。心が暗くなり涙が溢れるのは、二人の過去の記憶がおのずと齎すものであろう。

「ヴェール」はツェランの詩によく出てくる単語である。「明るく澄んだヴェール」と訳したが、原詩ではヴェールと抽象名詞「明澄さ」とが同格で置かれている。「明澄さというヴェール」という訳がより原詩に近い。ものを隠す機能を持つヴェールは明澄さや明晰さと対立する逆の機能を持つものと見えるが、ツェランにあつてはその逆説が真実となる。そしてその「ヴェール」が存在する場はおそらく現実世界とは異なる異次元の世界である。だからそこで「あらゆる君は一本の木の枝となる」「あらゆる君」と訳したが、原詩を直訳すると「どの君も」となる。すなわち「君」は複数存在し、どの君をとつても君は木の枝となっているのだ。時間的変異の中にあるどの君も、ということか、あるいは空間的存在であるどの君も、ということか、その両方であるのか。君が一本の樹木となりあちらこちらに向かつて枝を伸ばしているというイメージなのかもしれない。樹木もツェラン愛好の単語である。

「決して人間ではなく」ただの木の葉なのだ、と念を押している。君とぼくとの生身の人間としての関係が表されているのではなく、質の違う世界における質の違う二つのものの寄り添い方である。その質の違いを存在させているのはまさにこの詩の世界なのだ。

ちなみにタイトルとなっている「煙水晶」は、ドイツが殺された夫から貰った指輪であり、煙水晶は見つめるとその内部にヴェールのようなものが現れてくるのだという。その宝石の内側の世界と、船の針路の先に現れたこの世のものではないヴェールとが、二人の内面において重なり合っているのかもしれない。

なおこの詩はタイトルを「沖合にて」と改められ、詩行も僅かに改変されて、詩集『ケシと記憶』の中に収められ

ることになる。

(二) エーリカ・ジュネ

ツェランがパリ到着後真つ先に手紙を書く相手はバッハマンと考えるのが普通であろう。ところが事實は異なり、一九四八年七月一三日パリに着いたツェランがその三日後の七月十六日に真つ先に手紙を出しているのはジュネ夫妻なのだ。しかも八月一九日にはエーリカ一人宛に長文の手紙を出している。今までエーリカはエドガー・ジュネ夫人として、いわばジュネの背後に隠れた存在としてのみ認識され、照明を当てられることはなかった。筆者がそのエーリカに注目したのは、以下に示す一九五〇年一月一六日付けデームス宛手紙を読んでからである。

「エーリカから心を引き裂くような手紙をもらった……彼女はひどい病気で手術を受けなければならない。ひどく深刻な状況のようだ。恐ろしいことだ、クラウス！ (中略) 今頃はこの状況全てに対して何らかの形でぼくに罪があるのではないかと考えざるを得ないのだ。すぐジュネのところに電話してもらえだろうか？ (中略) すぐに知らせが欲しい。しかし僕から聞いたとは誰にも言わないで欲しいのだ。もしエーリカが一人であるなら言って構わない。(中略) ぼくの兄弟クラウス、今頃はとつても苦しい、そして全てのことに対して神の前で責任を取ることができているかどうか、勇気を持って考えることができないままでいる、できれば泣きたいくらいだ、ぼくは本当に無力でどうしたらいいのか分からない」⁽³⁰⁾

一九五〇年からジュネ夫妻は時にパリで生活していた。その間にツェランとエーリカが会うこともあったのではないか。一九〇七年生まれのエーリカは五〇年には四三歳であり、まだ妊娠する可能性があったとみられる。

別の手紙の中でツェランは「君がぼくにとつてこの世におけるたった一人の人だからだ。ぼくの言葉を話すたった一人の人だからだ。ぼくと同じ向かい合い方で世界に向かい合っているたった一人の人だからだ。ぼくは君より一〇歳年下だ、でもぼくが生まれたときに君も生まれたのだ」と記して⁽³¹⁾いた。かつてツェランはチエルノヴィッツ時代に恋人ルートに向かつて同様なことを書いていた。まさに恋人に対する「殺し文句」である。ツェランは一九四九年から五一年の間に二三篇の詩をエーリカに送っていた。

ウィーン時代にすでに二人は恋愛関係にあったと見られる。おそらく「不倫」といった倫理的裁断から離れて、このような関係を自由に結ぶことを、二人とも自分に対して許していたのであろう。この恋愛関係はツェランがパリに到着してからも続いていた。他のどの女性に対してよりも早く、真っ先に出されたエーリカ宛の手紙は、それを証明する一つの傍証ではないかと筆者は考えている。ちなみに二〇一九年に刊行されたツェラン書簡集で、編集者のヴィーデマンは、パリ滞在初期にエーリカ宛出されたツェランの手紙を採録し、人名索引につけた短いコメントで、「すでにウィーンに居る時からエーリカはツェランと恋愛関係にあったと見られる」との推測を記している。⁽³²⁾

(三) インゲボルク・バツハマン

ツェランがパリ到着以後最初にバツハマンに宛てて手紙を書いたのは、およそ半年経った四九年一月二六日であ

る。遅いと言わねばならない。ツェランもそれは自覚していた。「ぼくがこれほど長い間しかも強情に手紙を出さなかったことを、僅かの間忘れてもらえないだろうか——ひどく大きな心労があったのだ」とその手紙の中で言い訳している。

ツェランはこの年の六月二五日のバッハマンの誕生日に二つの輝くばかりのケシの花束を贈っている。バッハマンを驚かせようとしたのだ。この戦術は見事に的中した。以下バッハマンの返信である。

「全然予想もしていなかったもので、今日の午前中に舞い込んできた——去年もそうでした——あなたの手紙は私の心の真ん中を射抜いてしまいました。そうです、私はあなたが好きです、一度も言わなかったけれど。ケシの花の香りをまた嗅いでいます、深く、とても深く、あなたはこんなに素敵に私に魔法をかけてしまいました。決して忘れられないように」⁽³⁴⁾。

この年の八月にバッハマンはパリ行き計画を立てる。ツェランもそれを歓迎したが、しかしこの夏のパリ行きは実現しなかった。バッハマンが夏の殆ど全期間、神経虚脱状態で床についていたからである。バッハマンのパリ行きが実現したのはやっと一九五〇年の秋一〇月、三月にハイデガーに関する論文で博士号を取得してからだだった。

ツェランと生活を共にしようとパリに赴いたのであるが、二人の生活は僅か数週間しか続かなかつたらしい。「悪霊に憑かれたような、なぜか分からぬ理由で（中略）二人の間から呼吸に必要な空気が互いに奪い去られてしまったから」⁽³⁵⁾である。一二月半ばまでバッハマンはパリに居たが、その後ロンドンに回り、エーリヒ・フリートやヒルデ・

シユピールを知った。イギリス・オーストリア協会で自作詩の朗読をする機会も得、やがてウィーンに帰っている。なおこの時期バッハマンの友人ナーニ・マイアーもパリ留学中だった。

前にあげたエーリカの入院を巡るツェランのデームス宛手紙が投函されたのは、まさにバッハマンがパリに到着した二日後のことである。その中でツェランは次のように書いていた。「インゲはとても可愛い、彼女にまた会えたのは思っていた以上にうれしいことだった。彼女を通して君やまたナーニもほくの心の中で身近なものとなっている、でも彼女に全てを話すことはできない、まだできないのだ。彼女自身がほくと同じ一本の弱い葦に過ぎないのだから。インゲがここにいることをエーリカには言わないで欲しい」と。⁽³⁶⁾

【ツェランへの思い】

バッハマンのツェランに対する気持ちは激しく矛盾した力によって引き裂かれていたようである。パリでの共同生活の後に書いた手紙の中では「私たちがあらゆることにかかわらず、お互い厄介な敵同士だった最もひどい時であつてさえ、とても幸せだったということを、そもそもあなたは分かっているのでしょうか？」⁽³⁷⁾と書いていた。

一方でバッハマンは恋という不可思議で強烈な力によってツェランに激しく惹かれていた。

他方、ツェランがどのような人間であるのか分からぬ深い不安があった。

「私にとってあなたはインドか、もっと遠い暗い褐色の国から来た人なのです。私にとってあなたは荒野であり海でありとにかく謎なのです。あなたのことを何も知らない、だからあなたのことが不安なのです。あなたが、ここに居る私たちみんなと同じようなことをする人だとは思えないのです」。⁽³⁸⁾「あなたが大海の中に流れ出ていく様をひどく

恐れながら見ているのです。でも私は船を作り、流されて孤立無援になっているあなたを助け、舟に乗せて連れ戻したいと思っているのです」⁽³⁹⁾。

その葛藤の中、自分の未来の全てを賭けてパリに行き、ツェランとの生活に飛び込む決断を下すまでには、当然迷いもあったろう。ツェランを愛する力の大きさゆえに、その力に自分自身が飲み込まれてしまい、結果的に自分の全てがツェランの中に取り込まれてしまうのではないかという恐れがあったかもしれない。

「職業として文学を扱ふことをひどく恐れています（中略）にもかかわらず私はそうしてみようと思います」⁽⁴⁰⁾とバツハマンがハインリヒ・ベル宛に書くのは五三年二月。五月に「四七年グループ賞」を得る直前である。ツェランとの共同生活を送った五〇年頃の彼女は文学に強い関心を持ちながらもまだ進路が定まらない文学少女ではなかったか。これに対してツェランは詩人として立つことをすでに深く心に定め、そのために生きようとする人間だった。賭ける力の強さ大きさから言っても、文学的素養の深さから言っても、バツハマンから見たツェランは自分より大きく自分を飲み込む磁場を持つ人間であったろう。自分を喪失する危険を本能的に感じてバツハマンはツェランに抵抗したとも推測される。

ひと夏を神経虚脱状態で過ごすことを余儀なくされるバツハマンは、また書き終えた手紙を出すことを長くためらう人でもあった。ツェラン宛に書いた手紙を四通まとめて送ることもあり、ついに投函しないまままで終わりになることもあった。

彼女の繊細さは、ずっと後の精神科入院、薬物依存の果ての四七歳での煙草の火による自死とすら見える死に至るまで、終生変わらなかつたように見える。鋭敏な感性を持った者同士、深い次元で共鳴し合った時の内的充足感が強

烈であろうが、不協和音もまた鋭利で耐えがたかったのではないか。

ツェランはバッハマンとの関係に結論を出し、二人の関係を「友情」と位置付け、バッハマンもツェランのその気持を知ることになる。ツェランはバッハマンに母の死を語り、母の形見の指輪を与えていたから、バッハマンとの結婚を真剣に考えていた時期があったのであろう。バッハマンはツェランの気持が自分から離れたことを知り指輪をツェランに返している。「私がおおあなたを愛していくのかどうかは、今日から私自身の問題となりました。(中略)私は今日分かりました、おそらくあなたへの愛をなくすことは決しないだろうことが⁽⁴¹⁾」「私は全てを一枚のカードに賭け、そして全てを失ってしまったのです⁽⁴²⁾」とバッハマンは書いていた。しかしバッハマンはその後も五年五月のニーンドルフにおける「四七年グループ」の集まりでツェランに会うまで、なおツェランに対する「未練」を捨てきれなかったようである。バッハマンが偉いのは、二人の愛の問題と文壇にツェランが登場するため自分が助力することを峻別し、以後もツェランを助け続けることである。

(四) ハンネローレ (ハンネレ)・シヨルツ

二〇一九年になって、それまで全く知られていなかった女性宛の、ツェランの五通の手紙が、作家などの自筆原稿オークションで売りに出されるといふ事件があり、この女性が何者なのかツェランとどういった関係だったのか、騒ぎになった。手紙ではツェランが相手の女性をハンネレと呼びかけていた。ツェランの遺稿や日記、それに手紙類な

どは嚴重な管理下にあり、限られた人間だけが閲覧を許される。全体を俯瞰できるのはツェラン研究者であるヴィーデマンと、遺稿管理者のバデューぐらいではなからうか。そのヴィーデマンが探索に乗り出した。⁽⁴³⁾

一九五一年八月終わりから九月初めまで、二人は同時期にロンドンに滞在していた。しかもツェランはハンネレにベルタを紹介しているのである。あるいは未来を約束し合った関係なので親戚に引き合わせたと取れないこともない。今まで全く知られていなかった実は深い関係にあった女性ではないのかという推測が起きた。

探索の鍵は意外なところにあった。書かれた年が示されていないツェラン宛の手紙、ハンネレではなくハンネと署名された手紙が一通あったのである。その中には、一九六七年ベルリンで開かれたツェランの講演会に出席しツェランと個人的に話すことができたこと、またツェランから同年出版されたばかりの詩集『非在の者のバラ』を恵贈されたことに対する感謝が記されていた。ツェランの手帳には一月二一日午後三時半から彼女と会う約束があったことが記されており、名前はハンネレとなっていた。しかもカレンダー付手帳に彼女の西ベルリンの住所が記載されていたのである。ヴィーデマンは彼女の息子の一人を探し出すことができた。彼は二〇一一年に亡くなった母がツェランのことを話していたのをはつきり覚えていた。ここで明確にハンネレが何者であるかが特定されたのである。

ツェランとハンネレの関係がどのようなものであったのか残された手紙からは明確に読み取ることはできない。ハンネレはツェランより六歳下、離婚後間もなく西ベルリンからパリ大学に勉学に来ていた。彼女がロンドンに行ったのは戦前ロンドンに亡命したユダヤ人の友人を訪ねるためだった。この友人は後に彼女の長男の洗礼立会人となっている。彼女は映画のフランス語をドイツ語に訳す仕事をしていたが、画家で後にベルリン芸術大学教授となるエーゴ・ヘルツマンと再婚している。

彼女宛のツエランの手紙には、パリにおけるツエランの交友状況がかなり詳しく書かれていた。ツエランはパリのシユールレアリスムのグループと付き合いがあったことが分かる。またゴルの詩のツエランによる独訳が、出版社ローヴォルトの関心を引き、出版される可能性があったことも分かる。しかしこの企画はツエランとクレール・ゴルの関係が破局を迎えたことで日の目を見なかった。またストックホルム在住の「完璧な」独仏語を話す教養豊かな人間がツエランの詩を評して「ドイツ前衛詩が試みて果たせなかった総合がある」と言ったことに大変喜んだりしている。部屋代の値上げに音をあげたり、語学家庭教師の仕事の大変さ、奨学金取得の苦勞など、生活の困難さについても記していた。「長く伸ばした君の髪を見たい」という言葉からは、女性の髪の毛に対するツエランの偏愛ぶりがかがわれる。ハンネレが映画に関心を持っていたからであろう、ストリンドベリの映画「令嬢ジュリー」鑑賞後に書かれた詩「水と火」を手紙に添えたりもしていた。

結局ツエランとの関係の深さがどれほどのものであったのかは不明なままだが、一時推測されたような深い関係ではないだろうというのが筆者の判断である。

七 「普通の」パリ市民へ——ジゼルとの結婚

【ジゼル・レトランジュ】

一九五一年一月七日頃のこと、サン・ジェルマン通りのカフェ、ロワイアル・サン・ジェルマンでツエランはキヴァにジゼルを紹介された。そこにはキヴァとツエランの共通の友人であるモスコヴィツシとギ・フランドルも同席

していた。この後ダンスホールへ繰り出していったのだから出会いの雰囲気は良かったのであろう。

ジゼル・レトランジュは一九二七年生まれ、ツェランより七歳年下である。ジゼルは生まれた頃は伯爵、後に侯爵に叙せられる家系の出であり子供時代城館に住んだこともあった。先祖のルーツがフランス国外なのでレトランジュという姓になったと言われている。

厳格なカトリック教育を受けて育ち、アカデミー・ジュリアンで絵画を学んだ。ツェランと会った頃は国立民族・芸術博物館で臨時雇いの事務員として仕事をしていた。そこで若い民族学者であるイサク・キヴァと知り合ったのである。そのキヴァがツェランをジゼルに紹介した。ツェランとジゼルの人生にとって大きな役割をキヴァは果たしたことになる。ジゼルはスペインに強い関心がありスペイン語でスペイン詩を読んだり、スペイン各地を旅行して回ったりしている。またヴァレリーやアポリネール、仏訳のリルケなどの詩を読み、時に書き写したりしている文学少女でもあった。

出会ってすぐ一二月末には二人は恋愛関係になっている。一月一日付のジゼルの初々しい恋文を見てみよう。

「愛しい人 私はまだあなたのすぐ近くにいたままです、あなたの愛撫、あなたの眼、あなたの素敵な誠実さ、そしてあなたの愛の。

昨晚これほど大きな安らぎの中で眠ることができたとお伝えできるのは大変幸せなことです。私の唯一の願いは、あなたもまた安らぎの中にいるということを知ることです。

私を不安にするのはこの安らぎなのです、分かりますか——その安らぎは私にあって私本来のものではないの

です——およそ全く私本来のものなどではないのです、そしてそれを私に与えてくれたのがあなたなのです。私にはそれがなぜなのか分からないままです。私が何を考えているか質問を浴びせかけないでください、なぜなら私自身が分からないのですから。

私は理解したいのです。

私は認識したいのです。

私は知りたいのです。

あなたをもっと自由に愛するために、でもそれは私を少しばかり不安にもするのです——しかしあらゆる理屈を越えてあなたを愛するのはとても甘美なことです——

あなたがとても幸せであることを願っています、私は自分があなたからひどく遠いところにいる人間で、あなたから見てもひどく不完全な人間であると感じています。そのこともまた私を不安にします——

詩人を愛することは、素敵な詩人を愛することは、難しいことに違いありません。私はあなたの生、あなたの詩、あなたの愛に、値しない者であると強く感じています——でももしあなたがそのような人でなければ全てがもう私には存在しないも同然であるとさえ思えてしまうのです。

私にはあなたの声が聞こえます、そしてあなたがひどく近くにいると感じます——私はもっとあなたに近づきたい——私はあなたを見つめるのが好きです、あなたがそこにいると知ることが好きです、あなたを黙ったままじっと見つめるのが好きです、あなたは私に信頼を与えてくれ、私を常になく落ち着かせてくれるのです。

愛する人——、

もう私にとって新しい人生が始まったと感じています——あなたは私の心の中に一輪の命の花を創り出してくれたのです、その花はかろうじてそうと分かるものでありながら、しかしすでに大変優しく、また大変強く自分を認めさせようとしているのです——

私はその花を心の中で手放しません、私はあなたに会うことができない日はいつでも、その花の香を失うまいとして大切に嗅ぐのです、そしてすでにその花は私の心の中で、大変訳の分からない、また大変大きな場所を占めてしまっているのです。すでに強く感じられているものを理解するのに長く時間がかかってしまいました。⁽⁴⁴⁾

一読してすぐ強く印象付けられるのは彼女の謙虚さである。相手の中に「良きもの」を見出し、それを誇大に感じるのは恋愛の常であるにしても、彼女は自分をひどくへりくだった位置に置いてツェランに対して見るように見える。そして「詩人」という存在への深い敬意。明らかに彼女は詩人を特別な存在と見ている。ツェランもまたそうであったからこの点において二人は共通の認識を持っていたことになる。ツェランにとってこのような女性に愛されることは己の自尊心を支え、また強めてくれたことだろう。

そして「安らぎ」という言葉も目を引く。原語フランス語で *calme* —— 静穏なこと、心が落ち着いていること、平静なこと、安らぎなどを表わす言葉である。恋愛の只中にあるとき、通常は心がざわめき落ち着かないと思うのだがジゼルはそうではない。自分が愛されているという強い確証がある故なのだろうか。それとも性格的に本来のものとして——手紙の中では本来のものではないと断り書きをしてはいるが——静けさ平穏さを希求する人なのだろうか。

【親友だけに見守られての結婚】

知り合ってからおよそ一年後の一九五二年一月二三日、二人は結婚届けを役所に出して正式に結婚した。寄り添う二人を写したこの時の写真を見ると、ジゼルは実に幸せそうな顔をしている。証人として立ち会ったのはジゼルの親友二人だけである。ツェランの友人イサク・キヴァとギ・フランドルは来ることができなかった。

父はすでに亡くなっていた。残る母と三人の姉妹たちはこの結婚に激しく反対した。世間的常識から見れば当然のことであろう。相手はルーマニアから来た、いわばこの馬の骨とも知れない男である。しかもユダヤ人で無国籍者、フランス語ではなくドイツ語を母語としている人間である。フランスの由緒正しい侯爵家の血筋を引く自分の娘が、こともあろうにこのような男と結婚することに、母は到底賛成できなかったであろう。

家族全体の激しい反対を押し切ってジゼルはツェランと結婚した。偏見にとられない実に自由な考えの持ち主、しかもその自分の考えを実行に移す勇気を持った人であることが分かる。厳格なカトリック教育や貴族の家庭で育ってきた者が無意識に持つある種の「枠」から大きく外れ、ひたすら詩のために生きてるように見えたツェランが、何ら束縛を受けぬ自由の中に見えるように見え、そのツェランに憧れるロマンティズムがジゼルにはあったのかもしれない。彼女はエッチングを主に自分の表現形式として選んだ芸術家であり、すでに述べたように文学、とりわけ詩に対して理解がある人だった。ツェランにとっては、この上ない人と結ばれたことになる。

後にツェランは友人に向かってジゼルのことを次のように紹介している。例えばルーマニアの友人ペートル・ソロモンに対して。「ぼくの妻は（同時に）画家でもある、しかし、これが最も大切なことなのだが、彼女は本当に例外的な存在なのだ」⁴⁵。あるいはチェルノヴィツツ時代の友人グスタフ・ホームトに対して。「ジゼルはフランス人で、

結婚前はレトランジュと言っていた。もし駄洒落が許されるのなら、ぼくは（奇特で風変わりな女性）と結婚したことになる。奇特で風変りな、というのは、もう本当に稀になってしまった魂の上での、ということなのだ。この二年の間もし仮にジゼルがいなかったとしたらぼくはどうなっていたか分からない⁽⁴⁶⁾。精神の変調から、ツェランは後に二度ジゼルを殺そうとする。しかしジゼルはツェランと別居こそすれ離婚することはなかった。

【普通のパリ市民へ】

一九五二年一二月末から翌年一月にかけて二人はアヴィニオンなどプロバンス地方を旅行した。新婚旅行である。アヴィニオンのプラタナスの並木、そのプラタナスの樹皮は、後に二人の愛の印として重要な意味を持つようになる。ツェランはプラタナスの樹皮を自分の机の引き出しの中に大切に保存していた。

二人の新居はツェランのホテルの部屋だった。実に貧しくつましい新婚生活の出発だった。しかし六月にはレトランジュ家所有のロタ通りにある住居に転居した。二部屋だけの狭い住まいであったがツェランはとうとうホテルの仮住まいから脱出し「自分の家」をパリに持つことができたのである。しかも休暇にはレトランジュ家所有のバリ郊外の別荘で過ごすこともできるようになった。その小さな家で仕事をするのがツェランは好きだったという。強く反対したものの現実に結婚してしまった娘の生活をやはり心配せずにはおられなかった母の配慮による住まいの提供であつたろう。この点においてもツェランにとってジゼルとの結婚が幸いしたことになる。

そしてすでに記したように一九五五年には念願のフランス市民権を得るのである。これでツェランは無国籍者ではなく普通のパリ市民になれた。パリで生きていくための基盤ができたのである。残されたのは、翻訳や語学の家庭教

師という不確かな仕事ではなく、生活を安定して支えることができる定職を得ることだった。ツェランがエコール・ノルマルのドイツ語教師になるのは一九五九年のことである。

- (1) Jürgen Litz: »was bitter war und dich wachhielt« Ingeborg Bachmann, Hans Weigel und Paul Celan, In: Peter Göbens und Marcus G. Patka(Hrsg.): >Displaced< Paul Celan in Wien 1947–1948, Frankfurt am Main, 2001, S. 114
- (2) Ebd., S. 115
- (3) Ebd., S. 124. In: Walter Methlag: Paul Celan in Muhlau.
- (4) Briefe an Alfred Margul-Sperber, In: Neue Literatur, 26 Jg., H. 7, 1975, S. 52f.
- (5) Ludwig von Ficker: Briefwechsel 1940–1967, Innsbruck, 1996, S. 195
- (6) Paul Celan: G.W., Bd. 1, S. 45
- (7) Marbach の Deutsches Literaturarchiv (DLA の略称) の Handschriftenabteilung 所蔵の Erica Jené 宛の 1949. 7. 3 付の Celan の手紙の複製。
- (8) Bianca Rosenthal: Quellen zum frühen Celan, In: Monatshefte, Vol. 75, Nr. 4, Winter 1983, S. 403
- (9) DLA の Celan の 1948. 10. 24 付の Max Rychner 宛の手紙の複製。Paul Celan: »etwas ganz und gar Persönliches« Briefe 1934–1970, Berlin, 2019, S. 47 及び Paul Celan: Briefe 1934–1970 の巻頭
- (10) DLA の Celan の 1949. 12. 2 付の Ruth 宛の手紙の複製。
- (11) Wolfgang Emmerich: Paul Celan, Reinbek bei Hamburg, 1999, S. 82
- (12) Thomas Sparr: Todesfuge Biographie eines Gedichts, München, 2020, S. 105
- (13) Klaus Amann: Ein unbekannter Brief Paul Celans aus dem Jahr 1949, In: Sichtungen, 2001/2, 4/5 Jg., Wien, S. 102–128
- (14) Yves Bonnefoy: Le Nuage Rouge, Paris, 1992, p. 328 Yves Bonnefoy: Die rote Wolke, München, 1998, S. 260
- (15) <https://en.wikipedia.org/wiki/Serge-Moscovici>, 2020. 7. 16 閲覧
- (16) Ovid S. Crouhăniceanu: Paul Celan et la mélancolie, In: Paul Celan, Biographie und Interpretation, Konstanz, Paris, Iasi, 2000, S. 69–73
- (17) Paul Celan, Klaus Demus und Nani Demus: Briefwechsel, Frankfurt am Main, 2009, S. 486
- (18) Paul Celan: Briefe 1934–1970, S. 62

- (19) Paul Celan: »Du mußt versuchen, auch den Schweigenden zu hören« Briefe an Diet Kloos-Barendregt, Frankfurt am Main, 2002, S. 79 以下。Briefe an Diet Kloos-Barendregt への書簡。
- (20) Barbara Wiedemann(Hrsg.): Paul Celan—Die Goll Affäre, Frankfurt am Main, 2000, S. 16–27
- (21) Paul Celan: Briefe 1934–1970, S. 62f.
- (22) Paul Celan: Briefe an Diet Kloos-Barendregt, S. 11–19
- (23) Ebd., S. 69f.
- (24) Ebd., S. 73
- (25) Ebd., S. 74
- (26) Ebd., S. 72
- (27) Ebd., S. 79
- (28) Ebd., S. 135, 注 2。ツェラン宛手紙の草稿。ディートの手許に残されていたものである。
- (29) Ebd., S. 76
- (30) Paul Celan, Klaus Denuß und Nani Denuß: a.a.O., S. 39
- (31) DLA 1248 宛 Paul Celan 宛 1951. 3. 9 年の Erica 宛手紙。
- (32) Paul Celan: Briefe 1934–1970, S. 124f
- (33) Ingeborg Bachmann—Paul Celan: Der Briefwechsel, Frankfurt am Main, 2008, S. 8
- (34) Ebd., S. 11
- (35) Hans Höller: Ingeborg Bachmann, Reinbek bei Hamburg, 1999, S. 64
- (36) Paul Celan, Klaus Denuß und Nani Denuß: a.a.O., S. 40
- (37) Ingeborg Bachmann—Paul Celan: a.a.O., S. 24
- (38) Ebd., S. 11
- (39) Ebd., S. 14
- (40) Monika Albrecht/Dirk Göttsche(Hrsg.): Bachmann—Handbuch, Sonderausgabe, Stuttgart, 2013, S. 5
- (41) Ingeborg Bachmann—Paul Celan: a.a.O., S. 33
- (42) Ebd., S. 43
- (43) Barbara Wiedemann: Wer war Hannele? In: Süddeutsche Zeitung, 2019, 12, 11
 オンライン・シヨルツに関する文章はこの記事に引用される。

- (44) Paul Celan, Gisèle Celan-Lestrange: Correspondance 1951–1970, 1, Paris, 2001, p. 11f. 独訳 Breifwechsel Bd. 1, Frankfurt am Main, 2001, S. 7
- (45) Peter Solomon: Briefwechsel mit Paul Celan 1957–1962, In: Neute Literatur, 32 Jg., H. 11, November 1981, S. 73
- (46) Paul Celan und Gustav Chomedi: Ich brauche Deine Briefe, Berlin, 2010, S. 30
- Helmut Böttiger: Celans Zerrissenheit, Ein jüdischer Dichter und der deutsche Geist, Berlin, 2020
- Wolfgang Emmerich: Nahe Fremde, Paul Celan und die Deutschen, Göttingen, 2020
- Theo Buck: Celan und Frankreich, Aachen, 2002
- Andrei Corbea-Hoisie: Paul Celans »unbequemes Zuhause«, sein erstes Jahrzehnt in Paris, Aachen, 2017

本稿を書くにあたって注記したものの以外では以下の資料を参考にしている。

なおルーマニア語の人名表記については東京外国語大学オープンアカデミー講師鈴木信五先生にご教示を受けた。フランス語読みによる人名表記が日本で一般化している場合にはそれによっている。

ツェランの妻 Gisèle Lestrange は、*マヤ*に同じスベルを *Forvo* で聞くと「レストランジュ」と聞こえる。しかしジゼルと交友があった、詩人で学習院大学名誉教授の吉田加南子さんから「レトランジュ」と発音していた旨のご教示を受けている。オランダ人女性 Diet Kloos=Barendregt の日本語表記を筆者は今までオランダ在住の方のご教示によりバーレンドラクトとしていた。その方と連絡がとれないため念のため今回 *Forvo* で確認し、「バーレンドレ」と改めている。鈴木信五先生と吉田加南子先生には記してお礼を申し上げたい。